

第61回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議に参加して

藤本 美智子

<索引用語：リンダウ・ノーベル賞受賞者会議，リンダウ会議>

<Key words: Lindau Nobel Laureate Meeting, Lindau meeting>

この度、2011年6月26日から7月1日に開催された「第61回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議（医学・生理学分野）」に参加する機会を頂いたので、その様子をお伝えしたい。

本会議は、毎年約1週間、ドイツ南部の保養地であるリンダウにノーベル賞受賞者（以下、受賞者）と若手研究者が集う国際会議であり、世界各国の若手研究者の育成を目的として1951年に開設された。会議の内容は、物理学、化学、医学・生理学の3分野の順に毎年異なり、5年毎に3分野合同会議が行われる他、2年毎に経済学分野会議も開催される。今回61回目は医学・生理学分野が対象で、“Global Health”をテーマに23名の受賞者と、世界77カ国から推薦機関を通じて応募し選ばれた、566名の若手研究者が参加した。

1週間の日程であるが、毎日午前中に各受賞者から講演があり、その後はパネルディスカッションにて質疑応答が行われた。午後は約5~7名の各受賞者に会場が準備され、自由な雰囲気の中で、若手研究者とのグループ討論が行われた。夕食時には受賞者と参加者同士テーブルを囲み、ドイツの食文化や伝統音楽を楽しみながら交流を深める場となった。最終日には、リンダウ島の浮かぶボーデン湖をクルージングし、総括のパネルディスカッションが行われた。日本からの参加者は13

名で、がん研究や研究機器の開発など皆異なった分野を手掛けており、他分野の研究を知ることの面白さを経験した。聴講時の隣の席は毎日新しい顔ぶれで、いつも新鮮な情報を耳にすることができ、日本や他国の仲間と出会うことで知識も視野も広がった。また各受賞者からの講演は研究内容のみでなく、英知や経験を伝えようとする気持ちも伝わってきた。各受賞者の講演は本会議ホームページにて配信されているが、中でも特に印象的であった内容を報告する。

細胞生物学者 Christian de Duve 博士の講演内容は、“The Future of Life”と題した自然科学全般にわたるものであった。受賞者の世代が科学の発展の代償としたものに環境汚染や人口過多があることや、“seven scenarios for the future”の1つとして、我々および若い世代への教育を挙げられた。Telomeraseの研究をされている Elizabeth H. Blackburn 博士との討論で特に興味を持ったのは、telomeraseの変化が複数の疾患で生じている点である。Ubiquitinを研究されている Aaron Ciechanover 博士との討論でも、神経変性疾患と糖尿病といった一見異なる系統の疾患が共通の病態メカニズムをもつことが論じられ、両者とも疾患の共通性を指摘された。また、幅広い分野のトレーニングを行うことやコラボレーションの大切さも教えて頂いた。ゲル電気泳動法を開発された Oliver Smithies 博士は、ご自身を“a child of science”だと話され、現在もベンチで実験されている。電気泳動の結果に一喜一憂したこと、PCR機器を自作したことなど、博士の研究が純粋な好奇心に基づく実験の積み重ねであることを感じる講演であった。Human papillomavirus (HPV) 研究者の Harald zur Hausen 博士は、子宮頸癌の病態解明からワクチン開発に至るまでの長い道のりをご存知であり、まずは基

礎研究を行うことの大切さを教えて頂いた。“Global Health”のテーマで行われた最終日のパネルディスカッションでは、マラリアなどの感染症予防やワクチン開発を中心とした議論が交わされた。普段は日本の医療の現状を当たり前と考えがちであるが、各国医療の主眼が異なることを改めて感じた討論であった。

本会議を通して印象的であった点の1つは、がんや感染症、一部の神経疾患については各国多くの研究者に出会ったが、精神疾患の研究者に出会う機会が少なかったことである。今なお多くの精神疾患の病態は解明されておらず、これは特に基礎研究の発展なしでは成し遂げられない課題だと考えている。臨床での気付きやニーズを、基礎・臨床研究において多分野の研究者に伝えることは、研究の中で新たな着眼点をもたらすであろうし、

反対に研究上の課題を知れば、臨床で新たな観察点が生まれるであろう。そして、本会議はこのような情報交換を行う絶好の機会であると思う。

今後は、2012年に物理学、そして化学、医学・生理学分野の順に会議が開催される。研究について各国の同世代研究者と討論したい方、海外の友人と交流を深めたい方へ、参加を是非お勧めしたい。

謝 辞

本会議参加にあたりご援助頂いた日本学術振興会、NIH/NIDA、留学を支援して下さいましたDr. Tsung-Ping Su、林輝男先生をはじめ多くの方々、そして留学前から国際的視野を持たせて下さった日本若手精神科医の会の会員の方々にこの場を借りて深謝致します。